
ノンカピスコ 最後の卵

天野 涙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノンカピスコ 最後の卵

【Nコード】

N7746Q

【作者名】

天野 涙

【あらすじ】

有名料理研究家の桐谷黎子は、長年不妊治療をしていた。パートナーの佐藤と別れて、若いカメラマンの福山とつきあうが、妊娠しそうにない黎子は、一大決心をして、アメリカで卵子提供を受けて妊娠に成功。出産するが、その卵子にはあるルーツがあった。

第1話 もう終わりにしようと言われる

『もう、君の求めには応じない。』

佐藤は、そう言っただけ顔をゆがめた。

昼下がりのカフェ、佐藤の声に周りがざわめいた。

取り置き凍結卵が底をつき、新たな精子を欲しいと言ったら、佐藤は首を振って拒否したのだ。

もう十数回ほどの体外受精に失敗してきたから仕方ないのか？

（無理もない・・・もう終わりかな。この男とは・・・）

私、桐谷黎子。

ちよつとは名の知れた料理研究家。著作多数あり。

佐藤直彦、大学の同級生。弁護士。

彼とは事実婚。入籍はしていない。

私は卵管閉塞のため、長年不妊治療に堪え忍んできた。

一度30代のはじめに、佐藤の子を妊娠したのだが、10週目にあえなく流産。

あの日の苦悩は一生忘れない。

もう諦めようかと何度思ったかしれない。

でも、私はどうしても、子供が欲しかった。それは理屈でなく本能に近い。

あらゆる病院にも通ったし、いいと言われる民間療法も実行した。しかし、流産後再び妊娠することはなかった。

一度、養子も考えたことがある。

血は繋がらないでも、形だけでもあればいいと思ったが、でもすでにそのころは、年齢的には規定外だった。

しかし、だいたい30代後半なら、まだ自分の可能性を信じたいではないか。

それに、事実婚と言う形では、養子は迎える事は出来ないらしい。毎月、無惨に流れる血潮を眺めながら、私は一人ただ焦っていた。

そうしてる間に、凍結卵は底をついてしまう。

40代目前のある日、佐藤と一緒に病院へ行つて欲しいと頭を下げて懇願したのに、思い切り拒否されてしまったのだ。

『もう、俺たちお終いにしよう。オレはお前の都合の良い種馬でしかなかったんだ。うんざりだよ。』

『そんなことない。私は、あなたの子供が欲しかったのよ!』
『嘘付け! もう騙されない!』

佐藤はそう吐き捨てるように言うと、席を蹴るようにして去っていった。

私は呆然としたが、頭の芯だけハッキリ冴えていた。

(あの男の言うとおりだ。もう、あの男の子供を欲しがっていたのかどうか)

わからない・・・)

授かった命は、私一人の物だと思って育てていただろう。

母もまだ元気だし、私は仕事をこなしながら

育児をする自信もある。

ただ、種だけ提供してくれたい。

しかし、それが佐藤のものでなければならぬと言う理由が

もう見つからなかった。

ただ情性のように関係が続けて来たにすぎない。
私は観念した。

（佐藤は諦めよう・次はもっと若い男にするんだ・・）

闘志に火がついた。

第2話 料理上手は男に不自由しない？

私が料理に目覚めたのは、小学6年の頃だったと思う。

母が小学校4年生の時に病気で亡くなったが、

父が映画監督で多忙のため、祖母としばらく京都で暮らしたのだ。

祖母は京女で、その昔は売れっ子芸者だったそうで、

小料理屋をやっていた。

『レイコ、女はな、料理上手やったら、男に不自由せんのやで。』
が口癖。

『お祖母ちゃん、それは、どうして？』

『男ハンは、美味しいもん作る女が好きなんや。多少ぶさいくでも
かまへんの。ホンマは。』

『ふ〜ん』

『さ、そこのお芋さん剥いてくれるか？タダ飯は食わさへんさかい
な。』

『ハイ！お祖母ちゃん！』

まだ小学生の私に、男と女の事を教え、包丁の使い方まで教えてくれた祖母。

『レイコは筋がよいなあ。何でもちゃっつと出来るんや。』

褒め上手な祖母に褒められたくて、私はずいぶん腕を磨いた。

レパートリーを広げた私は夕飯を作って、祖母と食べる毎日が楽しかった。

でも中学生に入学前に、父が私を迎えに来たのだ。
女の人と一緒にだった。再婚するのだと言う。

大好きな祖母と別れなくなかったが、祖母は怒ったような顔をしてこう言う。

『レイコ、新しいママと仲良うやるんや。お祖母ちゃんにも大人の事情があるさかいな。ごねられても困るんやで・・・。』

そんなの、私を帰らせる方便と思っていたが、祖母はその後店の客だった紳士と電撃結婚をして、今は元気にハワイに暮らしている。

ハワイでも小料理屋をやってるそうだ。

父の再婚相手は、売れない女優だった加世子さん。ちよつと小太りで、見た目あか抜けない人なのだが、妙な色気があった。

『先生がね、お前はもうこの先売れそうにないから、あとは脱ぐしかないが、そんなプヨプヨ誰も見んぞ。俺のどこに来て家事でもしろ！』

と言われたのよと加世子さんはウッフと笑う。嬉しそうだった。

当時まだ28歳くらい、年の離れたお姉さんのよう。父は40歳だから

若い奥さんだ。

しかし家事はするのだが、料理だけは下手な加世子さん。

『先生がね、料理は黎子がやってくれるさっだって。』
『もう仕方ないなあ。』

私はしぶしぶ台所に立つが、盛り付けがイマイチセンスのないのを『黎子ちゃん、私が盛りつけくらいするわ。』と加世子さんがカバ

！。
意外にもセンスありで、同じメニューでも見違えるくらい美味しうだった。

そして父が嬉しそうにビールを飲み、私が作って、加世子さんが盛り付けた

夕飯を食べるのが楽しかった。

後で聞いたが、加世子さんは子供が産めない身体だった。

『その分、不憫な黎子を可愛がってやってくれ。』と父は頼んだらしい。

その加世子さんは、今も私のよきパートナーと一緒に暮らしている。

（お祖母ちゃん、料理上手は男に不自由しないって言ってたじゃない。）

佐藤が去った後、そんな事を何となく思い出した。

第3話 父の秘密

確か・・

私が20歳になった頃、加世子さんが浮かない顔をしてた時期があった。

『加世子さん、どうしたの？なんか心配な事でもあるの？』

継母ではあるが

私にとって加世子さんは姉のような存在。今更ママと呼ぶのは照れがあった。

加世子さんは、お弁当を作る手を止め、私の方を振り向く。目に涙を溜めていた。

『パパに女の人でもいるの？』

私としたら何気に言ったのに、加世子さんは顔色が変わった。

『・・・そうみたい。おまけに子供までいるらしいの・・・』

『ええ〜!?!』

この私に弟か妹がいる????

青天の霹靂つてのを初めて経験した気がする。

加世子さんは、その親子の住む家まで突き止めていると話す。

お節介にも、加世子さんに告げ口する人がいるようだ。

『もうパパったら・・私は加世子さんの味方だからね。』

留守がちの父にかわり

血の繋がらない私を可愛がってくれた加世子さんに恩義を感じていた。

そして、夏のある日、加世子さんと二人で、その女の家まで偵察に行ってみた。

女は坂井真由美と言う。女と父がなんで知り合ったのかはわからないが、

うちから二駅先で、坂道の途中で隠れるようにある小さな家に住んでいた。

（することが卑しいので、家まで卑しい・・・）

そんな事を思っていたら、何と、父親が出てきた。

私達二人は慌てて、陰に隠れた。その際壁に思い切り顔をぶつけアザをつくってしまった・・・。

そんな私達の心配をよそに、父親は

『マーくんと風呂に行つて来る。』なんて暢気に言いながら、

5歳くらいの男の子を連れて出かけて行った。

父は広い風呂にはいるのが好きで、よく近所のサウナに出かけていたのだ。

マー君は慣れた手つきで父に甘え、よく笑いながらサウナの店に消えていった。

（あの子が私の弟???）

二人呆然と立ちすくんでいると、その女の家からいい匂いがしてきた。

炊き込みご飯でも炊いているのだろうか・・・

炊き込みご飯は父の好物だ。まだ時間が早いがサウナのお風呂上がりいい気分、女二人の心配をよそに、美味しそうにビールを飲み干す

父の姿が想像された。

（何やってんのよー！！）

サウナの前で陣取って、父に蹴りの一つでもおみまいしようと思ってたなら、意外にも加世子さんが止めた。

『待って、もう少し様子を見ましょう。私にも考えがある。』

その後、加世子さんは思いも寄らない行動に出た。

第4話 迷子の子猫

それから数日後、その日も暑い日だったと思う。

私が帰宅したら、リビングのソファアの上に男の子が寝ていた。不審に思って覗き込むと、先日見かけたあの男の子だった。

うつすらと寝汗をかき、よく眠っている。

私は驚いて、加世子さんを捜した。

『黎子ちゃん、お帰り・・・』

加世子さんは、なにくわぬ顔で部屋に入ってくる。シャワーを浴びてたらしい。髪が濡れていた。

『この子、どうしたの？この間の家の子でしょ？』

『ええ、そうよ。スイカ食べようねって言って連れてきた。』

『ええ？この子の母親は知ってるの？』

加世子さんは、曖昧に笑い首を振る。

（まさか・・・誘拐???）

驚いて立ちすくむ私を後目に、加世子さんはどさっとソファアに座って、父の煙草に火をつけて吸いだした。普段はめったに吸わないのに。そして、少し気持ちが落ち着いたのか

『あんまり可愛いので、連れて来ちゃった。』と悪びれずに言った。

確かに、無防備な寝顔を見ると、その気持ちはわからないでもないが、相手の母親である女も心配してるだろう。

『で、どうすんの？』

『え？どうもしないけど・・・でも本当に先生の子供なら、引き取って育てちゃおうか。』

『・・・本気？それ・・・』

加世子さんは少しおどけて笑う。

『先生、男の子も欲しかったのかなって思うと・・・足が勝手にあの家に向かってしまったの。』

どうやら公園で一人で遊んでる彼を見つけて、話かけて連れてきたらしい。

『簡単についてきて・・・危ないったらないわ・・・。』

少し汗をかいたマー君とやらの髪を優しくなでる加世子さん。

しかしその時、少し力を入れて、彼の毛を引き抜いたのを私は見てしまった。

ソレが何を意味するのかは、その当時の私は気づかなかったけれど。

しばらくするとマー君は目を覚ました。不思議そうに辺りを見回す。

『じじい、どじい？？』

『オジサンのお家。さあ、スイカ食べましょう。』

『ママは？？』

『ママはお仕事みたいよ。オジサンが送ってくれるから心配しないで。』

加世子さんは、子供に有無を言わず、言い聞かせる。凄みがあった。

それに圧倒されたか、黙ってスイカを食べ始めるマー君。

夜になると、父が帰ってきた。

加世子さんは父に連絡したらしい。慌てて帰ってきたみたい。

『マー君、遠いところまで来てくれたんだね。』

父は苦笑い。少し卑屈に見えた。

『うん。』

『さ、ママが心配してるよ。お家に帰ろうか。』

父は逃げ出すかのように、あたふたとマー君を連れ出したのだ。

『マー君、また遊びに来てね。』

加世子さんは、鷹揚に手を振り、二人を余裕で見送った。

第5話 思い出はいつも

その後、マー君の素性がわかる。

加世子さんの調査

名前は、坂井真麻。

マー君は、父の映画の子役オーディションに応募してきた役者の卵らしい。

父としては、その愛らしさに・・・と言うか

昭和初期の子供の素朴さに似た雰囲気がいதாகに入っただのに、周囲が役のイメージにそぐわないと反対したと言う。

何ということはない、大手芸能事務所の子役タレントに、ごり押しされ決めさせられたのだ。

力関係や義理人情に阻まれ、マー君の起用を断念した父は諦めきれず、家に行ったようだ。

今回は駄目だったけど、次は是非とも君を推したいと伝えたかったらしい。

そこで、母真由美に会った父。

夫を交通事故で亡くし、小さなスナックを経営している。

少し寂しげな風情で、まだ若い真由美に、心ひかれたのは言うまでもない。

真由美にしても、マー君を子役にしたいわけだし、

何とかその道筋をつけたい一心で、父を歓迎しただろう。

（その歓迎の程度はどこまでなのか定かでないが・・・）

マー君も父に甘え、ずいぶん懐いてしまったようだ。

と言う父の話だそうだが・・

『そんなの信じられる???』と加世子さんは言う。

『作り話を作るのが仕事なんだから、何とでも言うわよ。』

なので、マー君と父のDNA鑑定をしたと話す加世子さん。
それで100%可能性なしとの結果が出て初めて信用したという。

『でも、ショックだった。先生、男の子がそんなに欲しかったのか
なと思って・・

私は産めない体なので、悔しくて情けなかった。』

浮気された事実よりも、その方がこたえたらしい。
私の前で、加世子さんは大粒の涙をポロポロ流した。

子供が産めないって辛いんだと同情した。
でも、まさか将来自分がそれで悩むなんて想像もしなかった、
その頃の私。

それからマー君は、映画ではなくテレビドラマの子役として
活躍するようになった。

大手の事務所に入ったらしい。それは父の紹介なのかどうかはわ
からない。

しかし父はマー君に興味を失せたらしく、父の映画に彼が起用され
ることはなかった。

『ふーん、確かに怪しいな。君のお父さんとその母親。』
『そう思う?』

『ああ、そそられるもん。未亡人なんて・・・』

あの頃、そんなことを言われても、ちつとも嫌じゃなかった
元パートナーの佐藤。

苦学生だった彼の部屋で、私は毎度手料理を作り
二人で仲睦まじく食べていた。

モリモリ食べる彼が頼もしかったのに・・・
思い出はいつもほろ苦い。

第6話 テレパシーをキャッチする？

『見てるわよ。』

『え？何？誰が？』

『もちろん、黎子ちゃんを・・・あの若い男の人・・・見て・・・』
『・・・・？？？』

佐藤と別れて、1ヶ月後くらいのある日、久々に加世子さんとジムに行った。

マシンで、軽く運動して一汗かいた後のこと。これからプールにしようか

どうしようか話していたら、ふいに加世子さんが小声になって言うのだ。

振り向くと、確かに窓際に男性が一人、こちらを見ている気がする。しかし、周りには他にも運動に励む人が数人いる。

『加世子さんの思い過ごしじゃない？』

そう、私はそんな人目を引くほどの美貌でもないし・・・と思ったが加世子さんは首を振る。

『うつん、絶対そうよ。新しいトレーナーかしらね。以前にはいなかったように』

思うけど・・・』

加世子さんは悪戯っ子のようににはしゃぐように言う。

『ね、ランチでも誘ってみようか。私、声かけてみるから、待って。』

『ええ、やだ、恥ずかしい！！やめてったら。加世子さん！！』

加世子さんは、私が止めるのも聞かず、いつになく、積極的にどんどん人並をかきわけて、その男性の方に向かつて行った。

（やだ、逆ナンじゃない。まるで・・・）

そわそわする私をよそに、上機嫌で帰って来た加世子さん。

『交渉成立。下のパスタ屋さんで半に待ち合わせすることにしたわ。』

『ええーやだ。そんな話になったわけ？』

『そうよ、黎子ちゃん。善は急げよ！！』

そう言えば、

佐藤との別れを話した時、加世子さんはサバサバした様子だった。

『金回りがよくなると、男って変わるのよ。いいじゃない。また新しい彼を見つければいいだけ。』

確かに、弁護士である佐藤は、消費者金融相手に過払い訴訟で大儲けしていた。

大きな弁護士事務所に入り、懐も潤ったようだ。態度だけでなく、顔つきも変わってきた。

『顔つきもハイエナのように卑しくなってきたわ。』と加世子さんは、

何を未練をもつ必要がある？と言う。

ただ長年私のわがままに付き合わせてきたから仕方ないとは思っている。

そしてパスタ屋。

加世子さんは、思い出し笑い。

『どうしたの？』

『ああ、思い出したら笑っちゃうわ。』

『何？』

『こっち見てたでしょ？って言ったら、わかりましたか？テレパシ
ー通じたんですねだって。』

『・・・ふざけた奴ね。』

『ウフフ、でも近くで見ると、結構いい男だったわ。』

『・・・ふん。』

『あ、来たわ。黎子ちゃん、がんばるのよ。』

これが私と福山との初めての出会いだった。

第7話 見え透いた罫にはまる？

『あなた、カメラマンなの？』

『ええ。まあ、まだ駆け出しですけどね……。』

福山浩一がくれた名刺を見てつぶやいた私。

彼は、少し恥ずかしげに笑う。最近やっと独立できたのだと話す。

横から、加世子さんがいたずら子のように名刺を覗き込んで言った。

『ここのジムの会員なの？』

『とんでもない。ここの年会費、知ってるでしょ？僕はバイトのトレーナーです。』

大学が体育系だったから……。』

『へえ。すごい。私、これから張り切って来ちゃおうかしら。』

『ええ、是非来てください。キッズのスイミングも教えてますから。』

』

『まあ、大人は教えないの？きっと、人気でしょうね。奥様方に・・

。

『ああ、襲われそうになりますよ・・なんちゃって。』

福山は、にこやかに笑い、美味しそうにパスタを口に運ぶ。

加世子さんはいつになく楽しげに話続けた。

『黎子ちゃん、ここ最近元気なかったから・・私が連れ出したのよ。』

『そうですか、俺も黎子さんがここの会員と聞いて、会えるのを心待ちにしてたんです。』

『ええ？なんで？』と私。

『もちろん、ファンですから・・黎子さんの料理本、大好きです。』

とても

写真が温かできれいな方がいい。レシピもわかりやすい。』

福山がそう言っ、初めて、私は思い出した。

彼に、どこかで会った事があるように思う。

確か・・・何冊か前の料理本の写真を依頼したカメラマンの助手ではなかったか・・・

そう話すと、福山は頷いて笑う。

『思い出してくれて嬉しいです。黒木先生の助手で仕事させてもらったんです。』

あの頃の私、確か佐藤との子供を流産した後の仕事だったと思う。

初老のカメラマンの黒木勇造氏が、ずいぶん労わってくださったのを思い出した。

その背後に、ひっそりと彼がいたなんて・・・少しも目に入らなかったなんて。

『黒木先生、黎子さんをすごく心配してました。体調悪そうだった。』

『・・・それで、黒木先生はどうなさってるの?』

『・・・去年、胃がんで亡くなりました。とてもいい先生だったです。』

『そう、残念ね。』

話題がそこでしたし、みりしてしまったので、加世子さんは気を取り直すように話した。

『ね、今度、先生も一緒に食事しましょうよ。』

『え、桐谷監督とですか？是非お願いします。』

福山の目が輝くのがわかった。

（彼の目的は私ではなく、父ではないのか???）

少しひるんだが、私の自尊心が大いに刺激を受けてしまう。

福山の罠にはまるの悪くない。

そう思ってしまった私。

第8話 無邪気な彼

それから、加世子さんと二人、しゃにむに頑張ってジムに通った。そして、福山を目で追うようになった私。

そうすると必ず彼は私を見つけてくれ、微笑んでくれる。

そんなことが、結構嬉しかったりする自分に驚く始末。

（まるで乙女みたい・・・）

そんなの久しぶりだった。

佐藤との関係が終わり、自分の年齢を考えると出産までのタイムリミットが

日に日に迫ってくるのを感じ、アップアップしていた自分に

まだ異性にときめく気持ちが残っていたなんて・・・と嬉しくなる。

ただ・・・そう思っているだけでも、行動に移すのはまだ先だと思っていた。

何が私を躊躇させるのか、わからないけれど少し臆病になっている。

『福山君、今日夕方であがるんだって、お茶でもしようよ。』

そんな私の気持ちを気遣ってか、加世子さんは積極的に彼に接近する。

『黎子ちゃん、グズグズしてたら、私がいただいちゃうわよ。』

軽やかに笑いながら、私の背中を押してくれる加世子さん。

福山は、いつも自然体で気負う風もなく、女二人につきあってくれる風だった。

『福山君は生まれは何処?』

『ご両親はご健在?何人家族?』

『趣味は?女性の好みは?』

『もちろん、独身よね?』

そんな加世子さんの質問攻めにもイヤな顔もせず、
にこやかに答えてくれる。

福山は、静岡県出身。両親は教育者と言う堅い家庭で育つ。

兄がいるが、兄も堅実な教育者と言う。

大学在学中に世界中を放浪の旅に出て、途中で撮影した写真が
コンクールに入賞。

卒業後、カメラマンの黒木に師事し、助手として働いていた。

黒木の死後、独立したが、駆け出しなので仕事面は恵まれてはいないようだ。

『あの・・・一ついいですか?』

『なに?』

『俺、黎子さんの手料理が食べてみたいです。』

『え?』

『黒木先生と一緒に撮影の仕事してたとき、あまりに美味しそうな
ので』

その晩、夢に見たくらいですから・・・是非!!』

『・・・それは大げさね。いいわよ、私の仕事場のキッチンに来る
?』

『ええ、嬉しいな。黎子さんの料理を毎日食べられる、ご家族って
幸せっすね。』

『アハハ・・・何が食べたい?』

『うーん、何でもいいっす。黎子さんが作ってくれるなら。』

にっこり、あまりに嬉しそうに微笑む福山。その悩ましい笑顔に、私は彼のために、渾身の料理を作る事を誓った。

（福山君、ついでに、私も食っちゃっていいわよ）

そう思わず、心の底でつぶやいてしまい、顔がほてるのを感じていた。

第9話 渾身の宴

福山との夕食を約束したはいいが

『渾身の宴』まで後何日・・・と張り紙されて
プレッシャーをかけられる心地がする。

（たかがディナーなのに・・・黎子、しっかりしろ！！）

いい年こいて情けなくなる。そう思っていると
加世子さんは、ふいに聞いてくる。

『福山君にご馳走するメニューは考えたの？まさか、肉系でガッツ
リでいくわけ？』

『え？ダメなの？若い男子はとりあえず肉でしょ？』

『そんなイージーな発想じゃ芸がなさすぎるわよ。』

『・・・そう？』

加世子さんに心の奥を見透かされた気がする。

（そうなの・・・そこなのよね。桐谷黎子として、それでいいのかと
いう事よ。

私が気にするのは・・・）

そうなのだ、見栄を張るつもりはないが、人と同じではダメな気がする。
する。

相手に、喜んでもらえる料理を作りたいだけなのだが、

あまりにセンスがないと思われたくないのも本音。

いい年の女はさりげなく相手に心配りして、心をつかみたいのだ。

『そうね、彼が夢に見たというくらい美味しそうに思った料理を出すべきよ。』

加世子さんは、黒木氏と彼がかかわったと思われる私の料理本を持ってきて、

ページをめくった。

今見ても確かに全てのメニューが美味しそうで、写真から湯気が立ち上って

きそうに思っくらい。若い女性向けなので、見た目よりレシピも簡単なのだ。

題名も『桐谷黎子の絶対彼が喜ぶモテ飯』なんてチャラくて赤面物だが、

写真のおかげか読者の反響はよかった。

『黎子さんのおかげで、彼と結ばれました！』なんてハガキもあつたっけ・・・。

人を喜ばせる料理を作りながら、自分はだんだん男が遠のいていく。その当時、あまりに仕事が多忙で、せっかく授かった子供を流産させてしまった。

そのころ佐藤も落胆していたのだ。

しかし、期日が迫っていたから、ろくに休みも取れず心身ともに最悪だった。

その分、ある意味渾身の料理だったから、彼も記憶に残ったのかもしれない。

私はその中で、シンプルだけど彩のきれいなバラ寿司をメインに後は魚料理、肉料理、野菜もとれるバランスのいいメニューを選ぶことにした。

それには加世子さんもオーケーのよう。

『そう、これなら、福山君喜ぶわよ。』

『当日は加世子さんも来る?』

『冗談でしょ?手伝わたら、すぐ退散するわよ。もちろん。』

『そう???』

『当たり前でしょ?信じられない!!』

加世子さんは目をまるくして笑った。

その二日後、私は、渾身の料理を作り、福山が来るのを待っていた。

第10話 そこに愛があるか？

福山は、約束の5分前に来た。

取材の帰りらしい、大きな荷物を持っていた。

モニターで観ると、やや緊張気味な顔をしている。

そして部屋に通すと、

仕事前のアイランドキッチンとテーブルの上の

ご馳走を見て、歓声をあげた。

『ヒャー！美味しそうっすね〜。』

特に、バラ寿司を見て驚喜する。

『これ、これ、夢に見たくらい美味しそうだったんですよ。どうして、

俺が食べたいって思ってたのがわかったんですかあ??』

福山は満面の笑みで私を見てる。

その笑みがあまりに無邪気なので、私は恥ずかしくなり目をそらす。

『それは・・・もちろん、あなたより長く生きてるから智恵がわくんですよ。』

ウソ、それは加世子さんのアドバースだった。

福山のようなタイプはお袋の味が好きだと言う。

甘えん坊で、きっと母親が大好きなのだと予想した。

バラ寿司以外は、懷石のように小皿に料理を盛りつけた。
見た目にも華やかで、栄養のバランスもいいはず。

そのテーブルには可憐な花を飾り、男をもてなす宴にしては上々だと自己採点する私。

（そりゃ、そうよ、渾身の宴なもの。）

福山は京都へ取材に行つて来たらしく、お土産の和菓子を差し出す。上品な宝石のような銘菓。わざとらしいネーミング。

『これ、虹の宴つて銘菓なんです。とっても美味しいんで、食べてください。』

『ありがとう！！本当、美味しそうね。さ、座つて、一緒に食べましょう。』

福山は、食べ方もきれいで、好感が持てた。

どんなに美男子でも、食べ方が汚らしいのはダメだ。音をピチャピチャたてて食べるのも幻滅。

食べる行為は思つ以上に人格が現れるものだ。

福山は、教育者の両親が共働きで、夕食は、いつも遅く帰つてきた母親が

手早く調理し、大皿にヨツコイショと大ざっぱに盛る料理が多かったと話す。

『もう、作つたから、食べゝつて感じですよ。今日みたいにこんなに手の込んだ料理つて、覚えなйтすね……。品数もせいぜい3品くらいだったかも。量だけは多かったかな。』

育ち盛り、食べ盛りの男の子二人を、懸命に育てる母親の姿が見えるような気がした。

『お母様の料理で、あなたは何が好きだったの？』

『そうですね、やはり、カレーですかね。定番すぎますけど・・・』

『そう、愛情があふれてたのね。きつと。』

『・・・そんな、普通ですよ。親だもん。』

『あら、今日の料理だって、愛情あふれてるわよ。あなたへの愛情が・・・』

そんな恥ずかしい台詞が、勝手に口から出た。

福山は、目を丸くしてみせる。

『・・・いいんですか。俺、その思い、受け取らせてもらっても。』

『もちろんよ、あなたこそ、どう？』

またしても私の口が勝手に動く。

『俺、もちろんOKです。』

福山は、目を見張り、大きく頷いた。

第11話 恋は巻き巻き？

『それで、進展はあったの？』

加世子さんは、横のベットで横たわりながら聞く。

エステシヤンの指が加世子さんの背中の上を軽やかに動く。

『なあんにもない。』

『え？嘘でしょ。』

『彼、タツパにバラ寿司の残りを嬉々として詰め込んで帰って行っ
たわ。』

『仕事があるからってさ。』

『そう、変な奴ね。でも可愛いじゃない。じゃあ、今度先生と一緒に
に食事させて、固めるか。』

『うーん、パパの威力を借りてってこと？？それもどうか？』

カメラマンなら、映画監督の父に会うことは魅力に違いない。

でも、父が目的で近づいてきたなら、ちよつとシヨックな自分
にとまどってしまう。

『ええ、じゃあ、黎子ちゃんもかなりその気なわけね。』

『やだー、からかわないでー、加世子さん。』

『そうかあ、可愛い黎子ちゃんの為に、継母がんばりますかあ。
』
『・・・・・・・・』

加世子さん、いつもありがとう。

感涙だよ。

私は、恥ずかしさで、枕に顔を伏してそう思った。

そして数日後には、加世子さんが、4人で食事をする段取りをしてくれた。

海外ロケで帰国したばかりの父は

私の料理を食べたいと言うので自宅にしたのだった。

福山は父相手に屈託なく笑い、よく飲んだ。

撮り終えたばかりの映画の事を語る相手が欲しかったのか、父はいつになく饒舌だった。

『いや、今日は君に会えて楽しかったよ。』

『僕も監督に会えて光栄でした。』

佐藤の時は、ニコリともしなかつたくせに、福山がいたく気に入ったようだ。

やはり同業者には親近感がわくのか？それとも福山が好青年だからか？と思うが、悪くない反応だった。

そして酒宴が終わる。父は酔いつぶれて眠ってしまい、加世子さんが介抱してる間、そつと福山は私にささやいた。

『今度の日曜日、お弁当持って出かけませんか。』

『え？』

『俺、黎子さんの巻き寿司が食べてみたい。』

場所は近くの大きな公園、今頃はバラがきれいに咲いてるとか・

(ずいぶん、チープなデートなこと・・・)

母親が多忙だったので、弁当に巻き寿司を入れてもらった
思い出がないと話す福山の無邪気な顔。

『いいわよ。もちろん。』

こうなれば、上巻きでも、細巻でも何でもい
や
と思ってしまう。

（あなた、私は若くもないの。恋は巻き巻き・巻き
て巻き
て急が
なきゃ

いけないの～！～！）

そう心で叫んでいた。

第12話 燃える手

私には、4人の幼なじみの友人がいる。

中学校の頃、同じアイドルを愛したのがきっかけで

互いの家で、よく遊んでいた。

好きなアイドルのCDを聞き、お茶を飲んでおしゃべりするのが何より楽しかった。

父の仕事の関係で、小学校は別だったのに、

私を受け入れてくれた人達なので感謝している。

年頃になり、久美子と保美が名古屋に嫁に行った。

夫同士が顔なじみ。早婚の久美子の結婚式で知り合ったのだ。

それから慌ただしく、残りの明子と恵の二人も結婚してしまい、独身でいるのは私一人になってしまった。

私は仕事が楽しかったので、そんなに気にはしていないが、子供の件だけは羨ましかった。

私達は、年頭にお茶会と称して、明子の家で集まるのが恒例だ。

その頃、みんな、まだ子供が小さく、話すことと言ったら

子供のことばかりだった。子供の教育、養育、発育・・・

話し出すと止まらない。

みんな話に夢中で、子供のいない私のことなど眼中にもないらしく、その場にいるのが、苦痛で孤独だった。

しかしそのくせ、私が体調不良や仕事を理由で欠席すると（なんで来れないの？）とやたらしつこい。

子供がいて、家があつて、そこそこ稼ぎがある夫がいて・・・

恵まれているあなた達に、私の気持ちがわかるものかと思っていた。

でも・・・後年、名古屋組の友人二人が不倫していることを知る。誰も知り合いのいない名古屋に嫁ぎ、夫の両親との同居で彼女達なりの孤独を感じていたと聞く。

自分一人がヨソ者・子供がいてもその気持ちは癒えなかった。仲間だからこそその告白なのに、

（子供がいるのに、何を贅沢な・・・）と私などは思ってしまった。

それは今年の年頭のことだった。

『黎子さん、今回の巻きずしも最高っすね。』

福山の声で、我に返る。

暗い所から日向に出てきたような錯覚を覚えた。

目の前には、グラウンドが広がり、親子連れが遊んでいる。薔薇園をぐるっと回ってから、ベンチでランチを食べていたのを思い出した。

福山は、ご機嫌に私の巻き寿司をほおばってる。

水筒のお茶を飲んでいた。

『黎子さん、なんか考え事でも・・・？』

『え？？うつん、・・・仕事で疲れてたのかも・・・』

『そうですか、すみません、俺の我が儘で、巻き寿司作ってもらって無理しましたか？』

『そんなことないわよ、あなたに喜んでもらえたら、それでいいもの。』

『黎子さん、あの・・・』
『なに?』

福山は神妙な顔をした。

『黎子さんは子供を欲しがっていると聞きました。』
『・・・』

『俺で良かったら、協力します。』

『え???』

『俺、マジですから・・・』

真剣なまなざしで

福山に握りしめられた手が、燃えるように熱かった。

第13話 トンネルの果てに

私は思う。

きつと、福山は後悔するに違いないと。

それは恐れにも似た感情だ。

その後、私も彼を暗いトンネルに引き入れたことをすぐに後悔したもの。

しかし、彼の率直さが嬉しくて、当時の私は容易に彼を受け入れてしまった。

それに、少し期待もあった。佐藤とはダメでも、相手が変われば子供を授かるチャンスが増えるかもと・・・。

彼に抱かれる度に、自分の中が潤い、生まれ変わる心地がするし、ひよつとしたら・・・このまま奇跡が起こるのでは？とかすかな望みを抱いたりした。

でも、それも儚い望みと知るのに時間はかからなかった。

福山に問題はないのに、私の卵子にもう力がないと感じていた。

でも一縷の望みをかけ、人工授精、体外受精とトライするも徒労に終わる。

福山はそれでも、落ち込む私を根気よく励ましてくれていた。

その頃には、すっかり私達の家族の一員のように家にも出入りしていたし、

父とも共に仕事をし、スタッフとも顔なじみになっていたのだ。

子供などいなくても、福山はもう家族同様で、私には無くてはならない存在になりつつある。

でも、だからこそ、福山の子供が欲しいと切に願う気持ちになる自分。

たまに、やるせなく彼の前で涙する。

そんな時、福山は優しく私の肩を抱き寄せてくれた。

『いや、俺、簡単に考えてました。赤ちゃんって、こんなに大変とはね。』

『・・・後悔してるの？やっぱり・・・』

『後悔？さあ、どうかな・・・。俺はただただ黎子さんの願いを叶えてあげただけです。』

『ありがとう・・・』

福山は謎めいた笑みを浮かべ

そのまま私を夢の世界に連れて行ってくれた。

ふと早朝に、目が覚めると

福山はネットのニュースを見ている。

『黎子さん、こっち、来てみて・・・』

半分眠気眼の私は、よろよると立ち上がると福山のそばでそのニュースを見た。

著名な日本女性が、アメリカで卵子提供を受けて妊娠に成功したという。

彼女はもう40代後半だった。安定期になったので公表したらしい。

『黎子さんもやってみない？』

『え・・・？』

『俺、アメリカだっで行ったっていいよ。』

『お金、いくらかかると思ってるの?』

『・・・・それは・・そうだけど。』

イヤ、そんなことが問題ではない。

自分のDNAを引き継がない子供でも欲しいかどうか
問題だ。

私の頭が真っ白になってしまった。

第14話 彼女の選択

それまで、私は第3者の介入など考えもしなかったのだ。まだ、自分の可能性を信じていたかった。

福山と私の子供、その唯一無二なる者の誕生を心から待ち望んでいたのだ。

しかし・・・それも限界か？

私は考え込んでしまう。

日本ではまだ代理出産も卵子提供も公では認められていない。無関係な誰かを巻き添えにして、自分の望みを叶えてよいのか？私は思い悩んでしまった。

以前何気なく見たテレビ。

貧しい国のある地方の村に、大挙として外国人夫婦が訪れる。代理出産をするためだ。

代理出産を受け入れた妻は大金を手にし、家を新築した。夫の年収の何倍ものお金が入ってくる。

リスクを抱える羽目になるが、目の前のお金には換えがたい。

そしてようやく赤ちゃんを手に入れた夫婦は満面の笑みを浮かべた。その顔を見ても、出産までの苦労は癒されるだろう。

お金をもらって、人助けも出来る。少々のトラブルには目をつぶる。善意と欲の両天秤が、その地方の村に蔓延していた。

しかし、自分の卵子は長年の不妊治療で随分疲れている。果たして、その村に行っても成功できるかと疑問だった。

それに、自分で産んでみないと実感が湧かない気がする。

子宮がないと言う理由のない自分は、選択する道ではない気もした。

それでは、健康な女性の卵子を借りる？

そして、自分で産む？を選択するべきか・・・と思う。

しかし、自分のDNAを引き継がない子供でも愛せるのか？
また新しい疑念がわき起こってしまうのだ。

私は思いあまって、継母の加世子さんに聞いてみる。
彼女はまだ30代の頃に病気のために子宮を失った。
そして父と再婚し、中学校入学前の私の継母になったのだ。
継母と言うよりは、年の離れた姉のように接してくれ、
私を可愛がってくれた。

加世子さんは、私の話を聞くと少し考え込む。
そして、私をじっと見つめて話し出した。

『血のつながりはそう問題ではないよ。現に私と黎子ちゃんは
とてもうまくいってるもの。ただ、全てうまくいくわけじゃないの
は確か。』

けれど、産めるものなら、私は黎子ちゃんに産んで欲しいわ。』

『・・・加世子さん。』

『福山君のDNA引き継いだ子なら、顔見てみたいじゃない？
面白いわよ、きつと・・・私達の人生まで楽しくなりそう。』

『そうかな・・・。』

『でも、その反対のケースもあるよ。その全てを受け入れる覚悟が
できれば、やってみてもいいんじゃない？』

『・・・。』

『私は、いつも黎子ちゃんを応援するよ。それだけは忘れないで・・・』

『加世子さん・・・』

私達は互いの手を握りしめ、絆を確認した。

第15話 潮風に吹かれて思うこと

そして、その数ヶ月後

私は、福山とアメリカの西海岸にいた。

海に面したシーフードレストランで、ある人を待っている。

福山は海の幸をふんだんに使ったパスタにご満悦。

屈託無くよく話す。気怠い浜風に、美味しい料理。

私は、ここに来るまでの数ヶ月の仕事の疲れがどっと押し寄せてきたかのように、軽いアクビをしたくなる。

ここに来た目的は一つ。

もちろん卵子提供を受けて、妊娠する事。

昨日は二人して、卵子提供のコーディネーターに会った。

そのコーディネーターは小太りな中年の男性で、片言の日本語が話せた。

名前はチャールズ。彼は親しげに、ここは日本人の依頼者も多いと話す。

彼は、私達が日本人なので、日系の女性がいいかと尋ねてきた。

『別にいいわ。血液型がA型（二人共がA型）で、若い人ならいいの。』

そう、若い人なら卵子も元気で、成功する可能性が高いのでは？と単純にそう思っていた。

しかし、少し思い直して言った。

『ごめん、黒人は外して。あ・・それから、出来れば美人がいいかしら。』

・・・それから、変な病歴のない人がいいわね。』

そうだ、もし、肌の色が極端に違えば虐めにあうかもしれない。それでなくても、エキゾチックな顔になるはずなのだから・・とメンメンと思いが浮かび、少し不安になってきた。

でも、ここまで来てしまったからには、もう後戻りは出来ないと感じる。

『わかった、ユーのお好みの顔の女性、このリストの中にある？』
彼は、分厚いリストを見せてくれた。

写真入りで、容姿、学歴、職歴、血液型などの詳細なプロフィールがそえてある。コード番号で分類され個人名はわからない。

こんな短時間で気に入った提供者が見つかるのか？

しかし、決めねばならないので、福山と二人ページを繰って話し合った。

そして一人、目に止まったのは、結局アジア系らしき女性。
思慮深く、澄んだ目をしている若い女性に心惹かれた。

この女性は、なんで卵子バンクに登録したのかしら？

まずそれが疑問に思うが、コーディネーターの彼は、

『そりゃ、彼女たちのそれぞれの事情があるの。留学するための資金にするなんて子もいるさ。』

とこともなげに言う。

ふん、そうね。

そうかも。

とりあえず、卵子提供者も決めて、病院に入院する日も決めたので後はリラックスして、その日を待つばかりだった。

『黎子、久しぶりだね。』

懐かしい声が聞こえた。振り向くと大好きな祖母が立っていた。

第16話 夢のあとで

『レイコ？まあ、大きくなって、わからなかったあ。』

『やあだ、大きいどころか、私、もう30超えちゃったのよ。』

『そうかあ・・それはそれはエライ遠くまで来てくれたなあ。』

久しぶりに会った祖母は、当たり前だけど老けて小さく見えた。

随分大柄な人なように記憶していたのに、ちよつとびくりした。

私が中学入学前に別れたので、もう20年以上会っていないかったのだ。

祖母のパートナーが大病したので、ハワイの店は閉めて、

西海岸に移ってきたと聞いて、私は卵子提供の治療の場所をアメリカにしようと

決めたのだ。

私はひたすら、祖母に会いたかったから、

しばらく病院に通う間、家に滞在出来るよう頼んだ。

祖母は、快く引き受けてくれて嬉しかった。

パートナーは最近ホスピタルに入り、先は長くないようだ。

内縁関係だったけど、最近形ばかりに籍を入れたと話す。

パートナーが亡くなっても、暮らせるくらいの財産はあるらしい。

『あん人が亡くなったら、日本に帰ろうかな・・。』

いつになく、気弱に言う祖母に、私は声を大にして言った。

『おばあちゃん、いつでも帰ってきて。パパも加世子さんも』

もちろん私も待つてるよ。彼もいるしさ。みんな、一緒に暮らそうよ。』

『うう、それもうつとおしいなあ。一人で近くで住むよ。由紀夫にそう言つといておくれ。』

顔をしかめて言う祖母に、私と福山は苦笑した。

『おばあちゃん、ひ孫も出来るかもしれないんだから、がんばって長生きしてよ。』

私は軽い気持ちでそう言ったら、祖母は神妙な顔をした。

『ああ。血がつながってなくても、レイコが産んだら可愛いさ。きつと・・・。』

『・・・・・・。』

それを言われると、つらい。

しかし、もう後戻りは出来ないのだと自分に言い聞かせるしかなかった。

そして翌日が卵子提供の日と言う前日の朝、私は奇妙な夢を見る。

横たわる私のお腹の中で、まばゆい光が満ちてきた。

そのお腹は見る見るうちに膨れ上がり、そして弾けて

中から出てきた天使が羽を広げて飛び立った。

そこで目が覚めたが、身体じゅうにびっしょりと寝汗をかいていた。

(きつと、成功するのね)

私はそう確信したのだ。

懐かしく、温かな光に包まれる心地がして、涙ぐみたくなった。

そしてその予感通り、私は妊娠したのだった。

第17話 幸せの陰で

それから、私は安定期に入ってから日本に帰国した。

今は便利になって、地球の裏側にいても

何とか仕事は出来る。

優秀なスタッフが入れば、何とか仕事はまわるのだ。

ありがたいと感謝の気持ちでいっぱいだった。

そして極力仕事はセーブして、不安定な時期を乗り切ることが出来た。

新しい生命が、自分の中で息づいてる幸福感。

それは何ものにも換えがたいと感じていた。

福山は一度電話でこんな事を言った。

『俺、もうお役目果たしたんで用済みですかね・・・』

『・・・何言ってるの！あなた、赤ちゃんの父親でしょ？』

『いいえ、赤ちゃんは黎子さんのものです。俺は手伝っただけ・・・』

『冗談言わないで・・・あなたを愛してるのよ。私は・・・』

『・・・本当に？』

『ええ・・・本当よ。やだ、恥ずかしいじゃない。』

『・・・俺、あなたから、もう入らないって言われるかとずっと怯えてました。』

『・・・』

『俺たち、結婚しましょう。』

『その言葉、待ってたのよ。ありがとう。あなた。』

私が帰国してから、私達は入籍した。

彼の方から、桐谷家の婿になると言う。私は一人娘だし福山家は、立派な長男がいるのでかまわないと言うのだ。

すでに彼は、父のスタッフからは『婿殿』と呼ばれて可愛がられている。

職人気質で、気難しいスタッフも多いのに、彼の人柄だと感心していた。

（彼となら、これからの人生、乗り越えられる）

身内だけの簡単な挙式で、私達は新生活に入った。

私は自分の周りの全ての人間に、祝福されていると思っていたのだ。

ある日、仕事の打ち合わせの後、一人でお手洗いに行った。パウダールームで誰かの声がする。

『ねえ、葉子、先生、よくやるよね。』

スタッフの由美子の声だ。

『ええ、海外まで行っちゃって、お金どんだけ積んだんだろうね。そんな金あるんだったら、私達の給料上げて欲しいよ。』

『だいたいさ、血の繋がらない子供産んで、何が嬉しいんだろ？』

『そうだよ、信じらんない。自分に似てない子供可愛いかね。』

『産んだら産んだで、私達に仕事のしわ寄せが来るんだよお。』

『もう、やってらんない。』

優秀なスタッフと信頼してきた葉子と由美子。

彼女たちの本音に愕然とした私。

足が震えたが立ち上がり、思い切りドアを開けた。
そして努めて、冷静な声で言った。

『ごめんね、あなたがたに迷惑かけて・・・申し訳ない。』

『・・・先生。』

由美子と葉子はギョツとして目をむいていた。
メイク道具を落としてしまった。

第18話 運命の朝

その時、私は頭の隅で思い出した事があった。

以前不妊治療で通っていた病院で、体外受精を受ける為にホルモン注射に通っていた頃の事。

処置室の看護婦が、陰で言っていた言葉を聞いてしまった。

『あんなにまでして、子供欲しいのかしら。
私なら、仕事が出来て大助かりなのに。』

カーテンのそばにいる私に、まるで聞かせるような声。
同僚の看護婦は慌てて言う。

『シッ！聞こえるわよ。』と。

（十分、聞こえてるわよ。至近距離なんだもん。）

私はショックで、へこみそうになりながらも、
その看護婦に注射してもらったのだ。

たぶん、無言で睨みつけてたかも。

担当の医師は信頼できたのに、

そんな看護婦のいる病院にはもう通いたくなかった。
なので

（ああ・・・この二人がそう思っていてても仕方ない事だ。）と思っ
た。

『先生、すみません！心にもないこと言っちゃって・・・
申し訳ありませんでした。ごめんなさい。許してください。』

困惑した様子の葉子と由美子は、ただただ私に平謝りするばかり。

（心にもない事って？本心なんですよ？）

でも・・・今二人に辞められたら困るのは私の方。
会社を立ち上げた当初からのスタッフだもの。
これから頼りにしないといけない人達だ。

『私の方こそ、あなたたちに甘えてた。悪かったわ。ごめんなさい。』

私も二人に頭を下げたのだ。

『先生・・・！！』

それで、お互いに、許し合うことが出来たと思う。

でも、そんなことは序の口なのだ。
口に出すか出さないかの違いだけ。

血の繋がらない子供を産もうとしている自分。

産まれてくる子供が、どんな運命を授かるかもわからない。
虐めにあうかも、自分の出生の秘密を知って動揺するかも？
喜びは始めの頃だけで、どんな難事が待っているかわからない。

その時、私は産みの母親として、子供を守ってやらなければならない
いのだから、

こんな事くらいで、へこんでなんかいられない。

（覚悟は決まってる。ママは、あなたのために強くなる。）

私はそう心で叫び、ふくらんだお腹を確認するようになった。

その後、何度かの危機を乗り越えて、無事に臨月を迎えた私。

季節はずれの台風が来た嵐の朝、
私は男の子を出産したのだった。

第19話 新しい命

きつと、私はその日のことを一生忘れないと思う。

出産予定日の前日から大事をとって入院していた私。

夜中に陣痛が始まった。

呼応するかのように、窓を打つ台風の風も強くなっていく。

ズンズンズンズンズンズン・・・

まるで自分の中で、マグマが吹き上げてくるような心地、
激痛の波が繰り返し私を襲った。

明け方、駆けつけてきた加世子さんが付き添い、分娩室に入った。
彼も、父も仕事で不在だ。

明日には病院に寄れるだろうと加世子さんが話してくれた。

（ついに、あなたに会えるのね・・・）

気分が高揚し、涙があふれて仕方なかった。

今までの思いが、頭によぎった。辛かったこと、悲しかったこと・・・
様々な思い。

（あなたに、どんなに会いたかったか、わかる？

あなたに会うために、私がどんなに苦労したか、わかる？）

そして、身を裂かれるような痛みを乗り越えて、元気な産声が
聞こえて、我に帰る。

オギヤー！オギヤー！

『おめでとう、元気な男の子ですよ。』

看護師さんの満面の笑みが見えた。

（よかった、よかった、ありがとうございます。）

感謝の言葉が声にならない。

看護師さんに抱かれてる我が子が、天使のように見えた。

しかし、そこまでしか覚えていない。

それから目が覚めたら、もう病室のベッドの上だった。
加世子さんが心配そうに見つめている。

『おめでとう、元気な男の子だったわ。お疲れ様。』

昼過ぎには、あんなに激しい雨がやんで、虹がかかったらしい。
それをさっそくカメラに撮影したと話してくれた彼。
私の手を握り締めた。

『俺たちの息子が誕生したんだね。まだ、夢のようだよ。』

『ええ……。でも……。』

『でも、なに？』

『男の子って、母親に似るのよね。だいたい……。』

『……。だから、なに？』

『あなたのご両親、がっかりなさるわね。』

産みの母親にも、父親にも似てない異国の女性に似た赤ん坊。
そんなことは百も承知だったはずなのに、無性に不安になった。

『何言ってるの？そんなの関係ないでしょ？俺たちの赤ちゃんだもん。』

二人で大事に育てようよ。』

『うん、そうよね、やっと産まれた赤ちゃんだもん。』

『そうさ。しっかりしてよ。ママ。』

私を励ますように笑う夫。

彼は、その赤ん坊に『一星』と名付けた。
家族の希望の一番星。

しかし、その当時、
彼も私も、家族の誰もが、
その新しい生命の秘密など想像もしていなかったのだった。

第20話 父の言葉

聞けば、卵子提供を受けて出産したあの著名人の女性の子供には心臓に欠陥があったと噂に聞く。

（一星は大丈夫だろうか???）

しかし小さな命はそんな心配をよそにすくすくと育っていくが、他の母親達が乳が張って、授乳に苦労しているのに私は人工乳で済ますしかない時は正直辛い。

（やはり自分の母乳って出ないのかしら？）

そう思うと、卵子が借りものであるのが寂しかった。でも、日々大きくなる一星の顔を見ると、そんな不安も吹き飛ぶ。

可愛くて、愛おしい。

私にとって無二の存在だった。

彼も、時間があると病院に駆けつけ、一星の顔を穴があくほど見つめている。

『ね、こいつの顔って、野生的と思わない？』

『え？どう言うこと？』

『うーん、うまく言えないけど、野生の風を感じるんだ。』

『???』

『たてがみのように髪をなびかせて、荒野に立っていそうな感じ。俺の勝手なイメージだけど。』

確か卵子提供者は、アメリカ国籍のはず。

そもそも理知的な目に惹かれて選んだのだ。
ロングの巻き毛の彼女は、風貌もイマドキだったし、野生のやの字もない。

きつと、彼のおおらかな気風を受け継いでいるに違いない。
そう、安易に思っていた、その頃の私。
母になれた喜びに浸りきっていた。

そして退院して、久々に家に戻ってきたら
父と加世子さんが待っていた。

『お帰り〜！！オイ！！早く、赤ん坊を抱かせてくれ。』

父は仕事を切り上げて、早めに帰宅したらしい。

『ほ〜ら、一星、お祖父ちゃんですよ。でもオ、お祖父ちゃん、
たばこ臭いから
いやよね〜。』

私は勿体付けて、父の前で、一星を抱いたまま背を向ける。
もちろん、ジョークだが嬉しくてならない。

『オイオイ、頼むよ。抱かせてくれ。浩一君、君からも言ってくれ
よ。』

拝むように言う父の姿が滑稽で笑うつもりが、ふいに泣けてきた。

（本当に、心待ちにしてくれていたんだ・・・申し訳ない、こんなに待たせてしまって。）

しかも、父のDNAを引き継がない孫だ。

（パパ、不肖の娘を許してください。）

柄にもなくそう思ってしまった。しかし、父はそんな私の感傷など何処ふく風で
私から一星を奪い取ると、しかっと抱きしめて言う。

『ああ、いい子だ、いい子だ。どうだ、俺に似てねえか？』

その言葉に、返す言葉もない私だった。

第21話 秘密のしっぱ

『監督、お孫さん、誕生おめでとございます。』

以前から、うちには、よく人が集まる。

映画監督をしている父の元には、制作会社の人、スポンサーの会社関係の人、

芸能プロの人、ベテラン俳優、女優、これから売り込み必至の新人俳優もいる。

はたまたどこで知り合ったのか大学教授、クリエイター、デザイナーなどなど……とにかく客が多い。

『うちは、エンゲル係数が高すぎて、年中赤字よ。』と加世子さんはこぼすが、

にこやかに客をもてなす。

此の繋がりも仕事には大事だからと割り切るしかないと思ってるようだ。

特に一星が誕生してから、お祝の客が絶えない。

その度、父は一星を抱きながら、客に言うのだ。

『なあ、なあ、コイツ、俺に似てねえか？』

事情を知っている人は苦笑い。言葉を濁すが、

おせじでも、似ていると言われると、父は心底嬉しそうな顔をするのが

切なかった。

皆、口には出さないが、

（監督、な、わけないでしょ？いつもの親父のギャグのつもり？？）

くらいに思ってるのかもしれない。

その中で、一人、ある大学教授から気になる事を聞いたと加世子さんが

言った。

『この子は、変わった人相をしてる・・・って。』

『どういうこと？』

『うーん、定かでないが、少数民族の出のような気がするって言うの。』

それも希少な民族じゃなかった。

『エッ？』

『まあ、人類学者らしいけど、もうろくしてるみたいだから、気にしないで。』

加世子さんは酔客の言うことだからと言うが、私は少し気になった。もしかしたら、この子には、とんでない出生の秘密があるのか？と

早速、夫である彼に話すと、

『ああ、提供者はアメリカ在住だからね、それはあるかも・・・。』

様々な人種が集まる大国だから、ありうる？と言いたいのか。しかし、彼もそんなに気にする風でもなかった。

一星は見た目普通だし、健やかに育ってる。

乳をグイグイ飲み、急速に大きくなってきているから心配ないと。

私は、腕の中の小さな我が子が、その出生の秘密の為に、どこか遠くに連れ去られるような気がして、ふと不安になった。

（やあね、そんなはずないわよ。）

私は、秘密のしつぽをかき消すように、我が子を抱く手を強めた。

第22話 秘密のかげら

多少の不安を抱えながらも、一星はすすくと育ち、あつという間に3年の月日が過ぎた。

その間、一星はどれだけの愛を、私達家族に与えてくれたろう。その小さな手のひらに触れる度、私は母になれた喜びを感じ、口からこぼすご飯粒まで愛しかった。

夫の彼も、それは同じようで、仕事の合間に、よく一星の面倒を見てくれていた。

祖父である父にも愛され、継母の加世子さんにも慈しまれ血の繋がりが半分でも、見た目どこにでもいる幸せな家族だと思っていた。

そんなある日、父が真っ青な顔をして戻ってくる。

私も彼も仕事なので、保育園の迎えを父に頼んでいた。

『黎子！大変だ！』

『パパ、どうしたの？一星に何かあったの？』

『イヤ・・・幸い一星には何もなかったが・・・しかし・・・』

『どうしたの？一星がどうしたのよ？』

『・・・浮いたんだ、ジャングルジムから落ちそうになったとき・・・』

『ええ？どういう事？？？』

父は、幼稚園に一星を迎えに行った帰りに、近所の公園に寄ったらしい。

まだ日は明るいし、その時間帯には、他に誰もいなかった。

ジャングルジムに興味津々の一星を遊ばせていたが、仕事の電話が入り、

父が一瞬目を離れた隙に、一星が足を滑らせた。

（あー！一星危ない！！）

しかし、次の瞬間、信じられない事が起きた。

一星は落ちそうになったが、浮いていたと言う。

それも無意識で、本人もわけがわからない風だったと。

宙で足をバタバタさせた一星を抱き留めて、父は周りを見回したと言う。

誰かに見られていないかと・・

幸い、誰もいないのを確認すると、一星を抱き上げたまま、その場を走り去ったと言う。

父は、神妙な顔で言う。

『オイ、これは、とんでもない卵をもらってしまったと言うことが？』

『え・・・？』

『提供者の出生を調べた方がいいんじゃないか？？』

『・・・？？？』

『しかし、たとえどんな事になっても、一星を守らなきゃならんがな。』

今までの漠然とした不安の種が、目の前に突きつけられた気がした。ただアメリカで、たいした考えもなく卵子を選び幸運にも妊娠して出産したただけなのだ。

しかし、反面どこかで、こんな日が来ることを予感していたのかもしれない。

（その時は、どんな運命も受け入れなくてはならないのかしら・・・）

自分の腕の中で、健やかな寝息をたてる息子の顔をただ見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7746q/>

ノンカピスコ 最後の卵

2011年12月20日14時49分発行